

源流の四季

第10号(2003年7月) 夏



Summer

発行所/多摩川源流研究所 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村4383
TEL 0428 (87) 7055 FAX 0428 (87) 7057
発行責任者/中村文明
協力/多摩川源流協議会(塩山市・奥多摩町・丹波山村・小菅村)
多摩川源流観察会
印刷/(株)サンニチ印刷
http://www.tamagawagenryu.net
E-mail: genryu@mx.cosmo.ne.jp



青大谷屋・天狗の頭(撮影 中村文明)

Contents 目次

- 源流・奥多摩の溪谷……………2
- 「多摩川源流プロジェクト21」開催……………3
- 特集「第1回緑のボランティア」……………4~5
- すくすく育て「水辺のたから」・「源流茶会」……………6
- 都水源林の経営計画の変遷……………7
- 秋のイベント紹介・全国源流シンポジウム……………8

源流・奥多摩の溪谷

源流の深山幽谷の深緑

春に芽生え 秋に散る自然の摂理
毎年繰り返される自然の生まれ変わり
深山幽谷の森の中で 人間は修験の道を求め
この自然の摂理に習い自己再生への願いを託し
自然界の聖なるものに寄り添ってきた



新緑の「百尋の滝」(奥多摩町)



日原川上流(奥多摩町)

自然環境の保全と源流の可能性を検討 注目される「多摩川源流プロジェクト21」



第1回「多摩川源流プロジェクト21」(2003年5月21日)

言「水源の森の再生・維持に関する検討及び提言」など将来の多摩川源流のあり方の基本となるべき事項についての提言や答申を取りまとめるよう諮問した。

安定した生活ができる 仕組みが必要である

当日は、各プロジェクト委員を始め、塩山市の廣瀬文二助役、奥多摩町の大館啓町長、丹波山村の守屋武彦村長、小菅村の廣瀬文夫村長、各市町村の担当課長、事務局の多摩川源流研究所中村所長など23名が出席した。

源流のあり方の基本を詰問
塩山市、奥多摩町、丹波山村、小菅村で構成する多摩川源流協議会(会長三枝剛塩山市長)は、5月21日、奥多摩町役場で第1回「多摩川源流プロジェクト21」を開催。プロジェクト委員に委嘱状を交付した後、同プロジェクト委員会に「多摩川源流の役割や価値及び可能性に関する提

言「この地域は非常に古い歴史がある。この自然に恵まれた土地に育まれてきた生活や文化を残していきたい。そのためには安定した生活が出来る仕組みが必要である。ご意見の中で源流域の可能性を検討していただきたい」とプロジェクト委員会への期待を表明した。

源流にとって有効な提言を まとめていきたい

プロジェクト委員は、川や森に関する専門家や学識経験者及び流域の行政担当者の次の9名である。高橋裕委員(東京大学名誉教授)、宮林茂幸委員(東京農業大学教授)、三島次郎委員(桜美林大学名誉教授)、山道省三委員(全国水環境交流会事務局長)、渋谷寿一委員(樹木・環境ネットワーク協会専務



あいさつする高橋委員長(奥多摩町役場)

厳しい源流の現状

プロジェクト委員会では、始めに各市町村の担当者が「各市町村の現状と課題」を報告した。塩山市の相澤広貴企画財政課長、奥多摩町の原島金廣企画財政課長、丹波山村の橋詰武雄事務課長、小菅村の佐藤英敏源流交流推進室長の各氏が「人口の減少は著しく、過疎地の波に洗われている」「源流域の林床の裸地化が想像以上に拡大し、土砂流出

防止機能が低下している」「高齢化、後継者不足、若年労働力の流出は、地域活性化を阻む大きな要因である」「地方交付税の減額により数年後には身動きのとれない状況になる」など、源流域の厳しい現状が示された。

若い人や子供らに実際に 源流を見て欲しい

こうした現状を踏まえて、活発な意見交換が行われた。「沢山の人が集まるようになり、貴重な自然が荒らされても困る。町おこし、村おこしとどう調和をとっていくかが一番の課題だ」

「森林・林業の新しい経済構造が必要。基本は木材生産であっても、環境材として水産物としても、子供たちの学習にも意味がある」という流域としての共通の認識を作っていくこと。「源流の役割や位置づけを下流の方々にどう理解してもらうか、森や川を含む水循環という言葉が正しいのか。源流に関する情報発信がまだ足りない」「多摩川はどこから流れてくるのか、若い人や子供たちには源流を実際に見て欲しい。自分の目の前にある川がどこから来るのか知って欲しい。これは自然に対する知識と常識といえよう」など活発な意見交換がおこなわれた。



第1回森林再生・緑のボランティア隊 (2003年5月11日)

機能向上と健全な森づくりへ第一歩 「森林再生プロジェクト」事業を開始

多摩川源流域に広がる民有林は、戦後の国の拡大造林により、スギやヒノキが植林されたが、外材の大量輸入による木材価格の低迷により、間伐などの手入れが行き届かず、人工林の荒廃が進んでいる。小菅村と源流研究所は、こうした現状を改善しようとして「森林再生プロジェクト」を開始した。日本財団の助成をうけて、村内の民有林を調査し、東京農大の宮林先生ら専門家による指導で「森林診断白書」を作成し、その処方箋に基づいて、森林の機能向上や適正な維持管理を目的にボランティアによる間伐を実施、十年かけての健全な森づくりの第一歩を踏み出した。

緑のボランティア隊に多数応募

年6回の「森林整備」を予定

「自然を愛する市民の皆さん。力を合わせて民有林の間伐や除々に汗をかき、あなたの手で源流の森に新しい命と希望の光を育てませんか」と、多摩川源流・緑のボランティアを呼びかけたところ、私たちの予想を遙かに超える市民が応募してきた。ボランティア隊による間伐などの森林整備は、第1回目が5月10日、第2回目が6月21日、第3回目が9月20日、第4回目が10月18日、第5

回目が11月8日、第6回目が12月6日、7日のいずれも土曜日の2日間の日程で年6回予定されている。この内、すでに十一月まで定員が埋まるという嬉しい悲鳴を上げている。

森林診断に基づく 整備事業

初日の開会式で東京農大の宮林先生は、「森林は、木材生産の機能、水源涵養の機能、国土保全の役割、環境教育、保健文化などの機能など国民生活に欠かせない公益的な機能を備えている。いわば源流域の森林は流域社会全体の財産に等しい。そこで、その財産を流域全体で守り育てようと言うのが今回の取り組みである。具体的な実施



小菅村・研究所・東京農大・森林組合のスタッフ(2003年5月11日)

に当たっては、森林の現状を正確に診断し、どんな手当が必要なのかの処方箋をつくり、森林整備の将来的な目標を明確にして作業に当たりたい」とこの事業の意義を解説した。さらに、菅原先生が、この間の森林調査の進み具合を分かり易く説明した。

森林組合の指導者に 感謝の声

午後からは、今川森林団地に向いて、地元森林組合のインストラクターの指導で間伐による森林整備を実施した。森林組合からは、木下栄行さん、望月秀浩さん、粕谷智雄さん、今井久志さん、中田無双さん、福田

克二さん、守重初男さんの7名が参加し、班編成をして、グループごとに丁寧に間伐作業の手順や作業方法をボランティアに解説した。特に伐採の際、木が倒れかかってケガをする場合が多いと言うことで、木を倒す際には、周囲に大きな声を挙げて知らせることを徹底していたのが印象的だった。森林組合のインストラクターの丁寧な、懇切な指導に参加者から感動と感謝の声が挙がっていた。

間伐が進むと、樹間から明るい光が林内に射し込み、森林が健全な姿を取り戻している様子が手に取るように分かり、ボランティアの顔も思わず明るくなっていた。



あいさつする宮林東京農大教授

光が森に差し込み森が元気になった

参加者の声にどんなに励まされたことか、参加者の声にどんなに心が温まったことか。参加者の皆さん有り難う。心の温さを測り測り測れる所、それが源流なのか。森林再生の取り組みのなかで生まれた連帯感と信頼感。この若い力が日本の新しい森を作る原動力となるそんな予感がする。参加者のアンケートを紹介する。

いい森に育っていきよ!

● 第1回目に参加できたことはすごく嬉しいことでした。スタッフの皆さんや大学の先生の話聞いてるうちに自分は凄いことしてるんだなという気がしてきて、ワクワクし



みんなで力を合わせ木を持ちだす

した。これから10年かけてプロジェクトをやっつけていき、100年後、20年後の小菅の森がどうなっていくか、凄く楽しみです。いい森に育っていきよ!という感じます。大学1年のうちから、こういう機会に現場を見て、間伐の作業ができ、とてもいい経験になりました。これから10年間このプロジェクトに関わっていききたいです。

森に光が入り感動!

● 間伐によって森林に光が入ることでも大分外観が良くなったように感じて感動しました。素人の私にも親切に森林組合の方々が作業の方法などを分かり易く教えてくださって、うれしかったです。これからは小菅村に来て、良い空気と美味しいご飯を頂いて、さらに山をきれいにするに少しでも役に立てたら



真摯な表情で間伐にとりくむ農大生

幸せです。今回は本当に楽しませて頂いています。ありがとうございます。

初めてづくしでした!

● 初めてづくしでした。木を切るのも初めてでしたし、間伐作業の意味についても身をもって体験することで自然と人間の関わりを考えさせられます。自然をそのまま残すことをしなかつた人間が、その後の管理を受けってきたことで大きな代償を覚悟することになったのです。今回の体験を生かし、自分の生活を省みて、今の日本がより良い状態になるように小さな努力をしていきたいと思います。中村所

これからが楽しみ!

● とてもよい経験をさせてもらいました。これから森がどうなっていくのか楽しみです。10年間60回、出来るだけ多く参加していきたいと思っています。木を切った後に森を見渡すと全体がとても明るくなっているという気持ちよかったです。森を手入れしていく大切さが良く分かりました。

心暖かくなった!

● 伐採なんてほとんど体験がなくて戸惑いも多く、心配でしたが、先生方が丁寧に分かり易く教えてくださって、おかげで楽しく活動することが出来ました。作業は体力勝負であることを実感しました。でも、その後の美味しいごはんや語りもあって疲れたと言うよりも楽しかったという印象の方が大きかったです。小菅村の方々も森林組

これからも続けて参加したい

● 紹介され、ほとんど知識を持たず来てしまったのですが、そんな素人にも、こんな大がかりなことが出来るのだということが分かり良かったです。記念すべき第1回に参加でき、これから10年間続くと聞き、是非私も続けて参加させていただきたいです。そして、他の関心のある人にも紹介したいと思っています。もう少し参加人数を増やして欲しいです。



小さい木は二人で力を合わせて運ぶ

すくすく育て『水辺のたから』

川崎宿河原にワンド出現

多摩川下流域で、台風などの大水という自然の力で削られた水城を保全し、子どもや市民に多摩川の自然、とりわけ水城や水辺に親んでもらおうという水城保全事業が進められている。今年の4月の完成以来、一旦工事で姿を消した植物が、気温の上昇とともに次々に芽をまたげ、いまでは水辺に繁殖し始めた植物が百種類近く観察され、自然の回復力の逞しさに驚きの声があがっている。



川崎市宿河原のワンド

そこは、川崎市多摩区の二ヶ領用水宿河原取水口上流の多摩川の岸辺で、この場所は、蛇行してきた多摩川の水流がちょうどぶつかる場所で、大水の度に浸食され、各所に水溜まりが発生していた。本来ならば、埋め戻して護岸工事が施工されるどころだったが、かわさき水辺の薬校などの要望を受けて、多摩川を管理する国土交通省京浜河川事務所が、水と緑の自然空間として利用できるゾーンに改修工事して完成させたものである。

工事完成記念式は、雨の中、4月20日、二ヶ領せせらぎ館でおこなわれた。会場には、かわさき水辺の薬校の子どもや保護者を始め、小菅村や対岸の狛江の子どもたち、国や川崎市の関

係者、市民など大勢が参加した。自分たちの提案が実ったかわさき水辺の薬校の子ども達は、今年度の活動の重点をこの新しい水辺に置くことにしている。水辺の薬校の佐々木梅吉校長は「地元の要望を真剣に受けとめ、子供たちの希望を叶えてくれた京浜河川事務所に感謝したい。子ども達が安心して川と遊べるゾーンが生まれた。『水辺のたから』として大事に育てていきたい」と今後の抱負を語っ

ていた。工事を担当した京浜河川事務所の吉田河川環境課長は「今回新しく完成したワンドは、子ども達が自然とまるまるつき合える、楽しい自然体験ゾーンだ。この間みるみる生き物が増えて自然の復元力に驚いている。全体で多摩川の自然と向きあえる貴重な水辺である。『水辺のたから』として、すくすく育てていってほしい」と地元の有効活用を期待している。

和菓子とお茶 両方最高

まつりで「源流茶会」催す

源流研究所は、5月4日に開催された第17回多摩源流まつりで、源流にこだわり源流を生かす取り組みの一つとして、源流の水に注目し、源流の水を使用した「茶会」を計画、東京大学茶道部有志の協力を得て、「源流茶会」を催した。

た参加者は、控え室で静かに順番を待ち、おもてなしの準備が整ったところで会場に案内され、正装に身を固めた茶道部員が運んできた和菓子をいただいた。和菓子は「新緑」と「湧水」と名付けられたもので、茶会の雰囲気盛り上げていた。和菓子を食べ終わったころあいをみて、お茶が振る舞われた。美味しい源流水と香り豊かな抹茶が芳醇な味わいを醸しだし、お茶を頂いた方々から「これは美味しい」「和菓子とお茶と両



「源流茶会」の様子（2003年5月4日）

方最高」「こんな正式なお茶は初めて」「来年も楽しみ」との声が寄せられ大変好評であった。

シリーズ「水源の森」④(最終回) 都水源林における経営計画の変遷

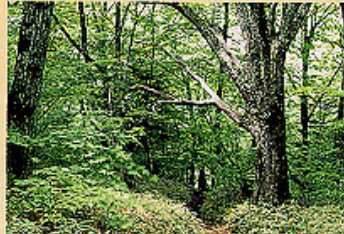


東京大学・大学院
農学生命科学研究科卒

泉 桂子

4、経営計画転換の背景

また、昭和四十七（一九七二）年、東京都による「東京における自然の保護と回復に関する条例」の制定に伴い、水源林の位置する地域は都の自然保護行政において、貴重な原生自然とし



都水源林

て位置づけられた。第7次経営計画書の天然林の取り扱いに関する項では、「東京都における自然の保護と回復に関する条例」（昭和四十七年）に基づく基本方針によれば、都の奥地山岳地帯で大半がコマツガ林、ブナ林等の原生林でおおわれている地域については、原生自然のまま保護するとともに、一部に見られる植林地等については、長期的に自然林への復元を目指すとの方針が示されている。従って、当局においても、この基本的立場を受けて、東京都下、山梨県下を問わず現在の天然林のうち原生林と見られる林分については、将来とも林産資源としての施業の対象にしない。とされている。この「東京都における自然の保護と回復に関する条例」は、高度経済成長に伴う東京都内での急速な自然の消失を背景として制定され、緑化政策の推進により自然の回復に努める一方、各種規制等により残された自然を積極的に保護し、都市と自然との共生を図るものである。同条例8条に基づいて定められた、「東京における自

然の保護と回復の基本方針」によれば、東京都水道水源林の東京都に位置する地域多くは「都の奥地山岳地帯で大半がコマツガ林、ブナ林等の原生林でおおわれている地域」に該当し、鳥しよ部を除いて、部内でまとまった自然が見られる唯一の地域とされている。そのため、これらの地域は「原生保全地域」として原生自然を現状のまま保護するとともに、一部に見られる植林地等については長期的に見て自然林への復元を目指す区域とし、各種の開発行為規制を厳しくするとともに、開発行為は認めないとしている。

以上は折しも自然の喪失に加え高度経済成長後期の大気汚染などの公害問題が激化していた東京都側からの要請である。これに加えて、天然林伐採中止と前後して、水源林と地元町村の関係にも変化が見られた。水源林の位置する自治体の多くで、入会権放棄の代償としての優先的立木払下げ制度が、水源林の伐採に關連のない定額の交付金制度に改められた。

東京都水道水源林のうちの丹波山村、小菅村にまたがる森林には入会権のあるものがあつた。水源林取得時に東京都は、旧来の入会慣行をそのまま残すと今後には悪影響を及ぼすと判断し、入会権を放棄させる条件として、両村の入会集落民に立木処分時に立木の特売権を与えることとした。明治四十五（一九一二年）、水源林は東京市の所有となつたが立木特売権は継承された。また、根拠が定かでないが奥多摩町についても立木の特売権があつた。

水源林では上記の立木の特売契約に基づいて、奥多摩町、丹波山村、小菅村との間で立木処分の随意契約を交わしていたが、上記三か町村の財政がひっ迫してきたため、消防費への資金援助、立木処分量の増加とその価格の引き下げ等の措置を陳情してきた。そこで東京都水源林は、従来の特売契約によれば水源林の立木処分量が多いほど三か町村の財政が豊かになる仕組みとなつているのを改め、一定の基準を定めて、年ごとに協議して定額を交付することとした。そこで、関係機関および三か町村と昭和四十二（一九六七）年協定を開始し、ようやく昭和四十六（一九七二）年三か町村との合意に基づき「覚書」に調印することができた。これによつて

明治三十四（一九〇二）年以來続けられてきた立木処分に関する諸約定は、一応廃止され、今後は交付金制度によって対応することとなった。覚書によれば、「明治三十四年以來の立木売り払いに伴う諸約定および慣行は、社会的条件の変化により、天然林の伐採が困難となった」とあり、水道の天然林伐採の中止を念頭に置いた契約内容となつている。逆に言えば、このような制度の変更により、天然林伐採の中止を実行する条件が整つた。

また、山梨県塩山市内萩原財産区については入会慣行があつたことから、山梨県恩賜県有財産管理規則に基づき、水源林の立木処分時売払い金額の一部を地元へ交付していた。昭和五十三年度に管理会から立木処分量の減少に伴う交付金の減額が、財産区管理会の運営上重大な支障になつてきていると、交付金の増額と定額化の陳情がなされたため、水道局は同年から入会権に係わる定額の交付金を支出している。

以上のように天然林伐採の中止と前後して、水源林の伐採量が多いほど地元町村が経済的に潤うという構造が定額交付金の導入により改められ、水源林の養機能最重視の経営計画にも沿つた関係となつた。

参加者募集！秋季イベント紹介

今年度主催事業の参加受付も、残すところ秋季企画のみとなりました。新企画「源流・干柿体験ツアー」では、源流地域の生活文化と風土を体験します。恒例「紅葉の源流・大菩薩探訪の旅」「紅葉の源流・水干探訪の旅」では、今年も水を育む水源林の紅葉を見に行きます。



新企画

「源流・干柿体験ツアー」

小菅村で、干柿をつくらうという企画です。みんなで柿とり、皮むき、そして吊るす作業までを行います。それを冬の間、村民が管理し、おいしい干柿が完成したら、参加者にお送りするというシステムです。干柿は、人15〜20個位の予定です。

この体験作業は、高齢化とともに衰退してきている源流地域の山村文化の伝承、そして柿の木を保存することで山村景観の維持を流域市民が支えることにもなります。是非ご協力下さい。

- ◎日時／11月22日(土)〜23日(日)
- ◎集合／JR奥多摩駅午前10時
- ◎費用／一万三千元(宿泊費・泊四食付き・保険代・干柿管理費・その他含む)

「紅葉の源流・水干探訪の旅」

多摩川は、塩山市の笠取山にある水干から百二十八キロかけて東京湾に注ぎます。紅葉の水源地を歩



水干き、あなただけの多摩川の最初の一滴を確かめてみませんか。コースは、歩きやす

- ◎日時／10月25日(土)〜26日(日)
- ◎集合／JR奥多摩駅午前10時
- ◎費用／一万三千元(宿泊費・泊四食付き・保険代・温泉代・その他含む)
- ◎対象／山歩きに自信がある方
- ◎定員／30名(先着順)

「紅葉の源流・大菩薩探訪の旅」

コースは小菅村の日向沢登山口から登り、大菩薩峠・熊沢山・石丸峠・天狗の頭・牛ノ寝・雄滝上流へと下る7時間ほどの行程です。

何種類ものカエデ科の樹木がたくさんあり、美しい紅葉が続きます。

- ◎日時／11月1日(土)〜2日(日)
- ◎集合／JR奥多摩駅午前10時
- ◎費用／一万三千元(宿泊費・泊四食付き・保険代・温泉代・その他含む)
- ◎対象／山歩きに自信がある方
- ◎定員／30名(先着順)

「第4回全国源流シンポジウム」開催

「自慢しよう源流域の素晴らしさ」つながろう川に生かされている私たちがテーマに、「第4回全国源流シンポジウム」が中国山地を源とし日本海に注ぐ高津川源流で開催されます。

これまでに、中村源流研究所長をはじめとする全国各地の源流に魅せられた者たちが集まり「全国源流シンポジウム実行委員会」を発足させ、各地でシンポジウムを開催してきました。今回は、その4回目になります。



水源公園の一本杉(島根県六日市町)

お問い合わせ：お申し込みは
小菅村役場(源流交流推進室)
☎0428(87)0111

委員会

◎講演
高橋裕先生(「世界水会議理事」)

特別報告

「多摩川源流からのメッセージ」
「言野川源流物語(奈良)」

◎前夜祭

日本一美味しい高津川の鮎を存分に食べよう!

◎分科会

「高津川の魚たち」「高津川・河川争奪の視察」「源流の生活と文化」「源流体験教室」等
現地体験と日頃の経験を自由に出し合い、励まし合おう

◎連絡先

全国源流ネットワーク(多摩川源流研究所) 中村
☎0428(87)7055
現地実行委員会事務局
☎0856(24)8661
担当 豊田武雄

◎日時
9月12日(金)〜14日(日)

◎場所
島根県出雲市・六日市町

◎主催
第4回全国源流シンポジウム実行